

同窓会誌

70



対談 新学部長／同窓会長
「母校・教育学部との新しい連携を求めて」

特集 「私が同窓会から得たもの～27の同期生会より～」

島根大学教育学部同窓会

活性化進む支部活動

益田・鹿足支部交流会 (2月17日)



〈研修会 (特別講演)〉



〈懇親交流会〉

東京支部総会 (10月28日)



〈ミニ講話〉



〈記念写真〉

出雲支部会 (8月4日)



〈夏井いつき句会ライブ〉



※P59～65に関連記事を掲載しています。

同期生会スナップ



※P21～50に関連記事を掲載しています。

学部ホームカミングデー (10月7日)



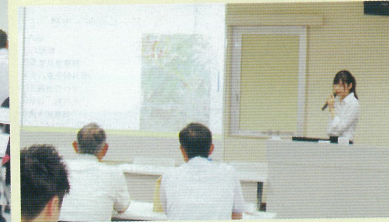
平成30年度の同窓会の活動

—同窓会の活性化を願って—

役員総会 (6月9日)



総会後の学生の発表



学部長・同窓会長 対談 (11月28日)



教育振興奨励賞授与式—作野広和氏 受賞— (12月4日)



刊行物の発刊



会誌70号
(H31・1月22日)



Leaf@同窓会 No.10
(9月21日)

ほっと一息カフェ



(毎月第4火曜日)

目次



カラグラフィア① 同期生会スナップ
 カラグラフィア② 活性化進む支部活動
 カラグラフィア③ 平成30年度の同窓会の活動—同窓会の活性化を願って—

母校今昔 教育学部「音研定期演奏会」の変遷
 巻頭言 大漢和と新明解 島根県教育庁 教育監 高橋 泰幸…… (2)
 対談 母校・教育学部との新しい連携を求めて
 新学部長 加藤 寿朗 同窓会長 有馬毅一郎…… (4)

教育学部最前線

これまでの幼小中一貫教育を基盤とした新しい附属学校園
 島根大学教育学部 附属学校園校長 齋藤 英明…… (14)

特集「私が同窓会から得たもの」…… (21)

- 電化製品の普及、中原校舎時代…… (22)
- 全国一斉学力テスト実施、川津キャンパスへ移転…… (26)
- 高度成長期・東京オリンピック・安保闘争…… (28)
- 島大学園紛争・教育学部鉄筋校舎へ…… (30)
- オイルショック、学生食堂の誕生…… (32)
- 物質主義の傾向、島根国体開催…… (36)
- ワープロ普及、ゼロ免課程・大学院設置…… (38)
- パソコンの普及、島大国立学校法人化・1000時間体験学修…… (42)
- スマホの普及、教職大学院の設置…… (44)
- 「同窓会から得たもの」のまとめ…… (47)

第12回教育学部ホームカミングデー…… (51)

- 発表
 石原 美和・森田 順子・角 真理子…… (52)
- シンポジウム・グループディスカッション・懇親交流会…… (55)

私の研究紹介…… (57)

支部からの声…… (59)

専攻だより —研究室はいま—…… (66)

第7回教育振興奨励賞決定…… (91)

- 平成29年度島根大学教育学部卒業研究題目一覧…… (92)
- 平成29年度島根大学大学院教育学研究科修士論文・研究成果報告書題目一覧…… (99)

ただいま活躍中!!…… (76)

『ほっと一息カフェ』を始めました!…… (78)

近況報告

- 本部だより…… (79) 有志会・同期生会だより…… (82)
- 島根大学教育学部同窓会規約・同窓会個人情報の保護に関する規程…… (101)
- 事務局より…… (20) (90) (105) (106) (107) (108) (109)
- 受贈図書紹介…… (19) 表紙に寄せて・編集後記…… (110)
- 表紙題字 野崎邦臣 表紙絵・カット 松本道博

教育学部「音研定期演奏会」の変遷

教育学部音研では、1954年に特別教科音楽教員養成課程（特音）の設置以来、60年以上にわたり各種定期演奏会を開催し、現在も音楽教育専攻がその伝統を受け継いでいる。

下の3枚の写真の演奏曲は、いずれもヘンデル作曲のオラトリオ《メサイア》である。《メサイア》は、独唱、合唱、管弦楽による規模の大きな作品となっている。

島根大学教育学部特設音楽科開設記念演奏会

1954（S29）年6月、特音の開設記念として、松江市公会堂（現在の県民会館の場所）で開かれた。

楽器の一部は地域の人からの募金によって揃えられ、オーケストラとしては充実したものであった。



島根大学第13回歳末慈善演奏会



1981（S56）年12月、島根県民会館大ホールで開かれた。

1970～80年代にかけては、歳末慈善演奏会として毎年12月に披露し、松江の年末の風物詩にもなっていた。

島根大学教育学部音楽教育専攻声専合唱団第58回定期演奏会

2013（H25）年12月、プラバホールで開かれた。

近年は「山陰の音楽文化資源を活用した地域連携推進事業—島根大学発、音楽による地域魅力化への試み—」の一環として実施している。



30年毎の3枚の写真を並べてみると、人数の増減や会場の変遷など、時代の移り変わりを感じる。



大漢和と新明解 辞書という世界の両巨頭

島根県教育庁教育監 高橋 泰幸

※この文章は「松江南高等学校校図書館報」（平成三十年三月）への寄稿を一部改めたものです。

電子辞書やウィキペディアが幅を利かせる時代。辞書をバラバラめくるといっておなじみの光景はいつか消滅するのではないか。そんなことを思うこの頃ですが、どっこい図書館には今なお様々な辞書が存在感を誇示しています。その代表格が『大漢和辞典』（大修館書店）です。

『大漢和』と言えばその圧倒的なスケール。一般的な漢和辞典は親字一万、熟語三万〜五万あたりが標準ですが、『大漢和』の親字は五万、熟語五十三万余。まさに桁違いです。

しかも、一字一字の解説が詳細。たとえば、親字「天」にはまず二十四項目の意味が列挙され、熟語・故事成語等を一、七〇二語掲載。実に五十八ページにわたって「天」の解説は続きます。こうして五万字それぞれに加えられた膨大な解説は、本編十二巻・索引一卷の全十三巻に収められ、出版されました。総重量四〇kg。引っ越し泣かせの大物です。

『大漢和』は漢字の読み方を調べる辞書ではありません。翻訳のない漢文を読むための辞書です。国内外において今なお中国文学・哲学研究者の必需品ですが、高校生にはいささか荷が重い。では、なぜここに取り上げるのか。それは、この大著誕生に至るドラマを紹介したかったからなのです。

大修館書店社長・鈴木一平が、それまでなかった本格的漢和辞典の編纂を思い立ち、漢字研究の第一人者だった諸橋徹次に話を持ち掛けたのが一九二五年。しかし、予備調査の段階で予測をはるかに超える労力を要することが判明し、終わりの見えないまま編纂事業が始まります。

一九四三年によくやく第一巻を発行しますが、東京大空襲により大切な資料を焼失。一からやり直し、全巻発行にこぎつけたのは一九六〇年。予備調査スタートから三十五年後のことでした。著者諸橋は酷使し続けた右目を失明、左目もやっとな暗がわかるほどという壮絶な作業でした。

そうしたドラマをつづる諸橋の「序」（巻一）と、鈴木の「出版後記」（索引巻）。いずれも一読の価値があります。

さて、続いては国語辞典の巨頭。大著というなら『日本国語大辞典』全二十巻ですが、ご紹介するのは『新明解国語辞典』（三省堂）。他に類を見ない独創的かつシニカルな解説が特徴です。たとえば、

「動物園：生態を公衆に見せ、かたわら保護を加えるためと称し、捕えて来た多くの鳥獣・昆虫などに対し、狭い空間での生活を余儀なくし、飼育殺しにする、人間中心の施設。」

「恋 愛：特定の異性に特別の愛情をいだいて、二人だけで一緒に居たい、できるなら合体したいという気持ちを持ちながら、それが常にはかなえられないで、ひどく心を苦しめる（まれにかなえられて歓喜する）状態。」

いかがでしょう。学校の「推薦辞書」にはあまり入れてもらえず、何をもつて「明解」というのかよく分からない一冊ですが、私は長年これを愛用しています。

面白くて奥深い辞書の世界。ちょっと覗いてみませんか。

高橋 泰幸氏 プロフィール

昭和三十四年、出雲市（旧平田市）生まれ

教育学部卒業後、広島大学大学院で中国哲学を専攻

安来高校・松江南高校長を経て平成三十年から現職



島根大学教育学部長室にて（加藤寿朗学部長＝右）

母校・教育学部との 新しい連携を求めて

—新学部長／同窓会長 対談—

今年度、教育学部では、新しい教育学部長が誕生しました。

今、学部も同窓会も新たな動きへの対応が迫られています。学部・学生・先生方の現状をもとに、教育学部と同窓会の新しい連携のあり方をめぐって、加藤寿朗新学部長と有馬毅一郎同窓会長に対談を行っていただきました。

■小・中学校教員免許の併有をめざして

有馬 遅くなりましたが、学部長就任おめでとうございます。きょうはお忙しいところ対談のお時間を頂き、ありがとうございます。

加藤 いえ、こちらこそよろしくお願います。

有馬 最初に、現在の島根大学教育学部の現状とか、抱えていらっしゃる課題などについて、お伺いしたいと思います。

加藤 平成二十九年度から新しい教育課程をスタートさせ、学部教育のリニューアルをしたところですが、一番大きな変更、改革は、小・中学校（高等学校）の免許の併有を基本とするカリキュラムを組んだということです。小学校が主で、中学校（高等学校）のい

ずれかの教科の免許、あるいは中学校（高等学校）のある教科を主としながら小学校の免許を取っていきま。この免許状「併有」というのがカリキュラムの目玉かなと思います。免許状併有にかかわる一定の単位修得が卒業要件になったということです。

有馬 卒業要件ですか。

加藤 この考え方としては、小学校教育を知っている中・高等学校の教員、あるいは教科の専門性を持った小学校の教員という、そういう教員が今後求められるという考え方で免許併有を打ち出したところ。一番身につけてほしいのは、小学校教員の基本になる子供理解をベースにした教育活動で、これは中・高等学校でも一層大切にしていきたい。一方、小学校教員もいずれかの教科の専門性をしっかり持ちながら、何かの強みを持った小学校の教員をということになります。

有馬 では小・中の免許併有の義務化をなぜしたかというか、その理由はどうなんでしょうか。

加藤 一つは、来年（平成三十一年）四月から教育学部附属の小・中学校が義務教育学校に変わります。学生が実習をする附属学校が九年間を見据えた教育というのを打ち出しますので、小・中の系統性を見据え、見通した教育ができる、そういう学生を育てることがで

きる。学部の教育課程も小・中免許併有にするし、附属学校も九年間の義務教育学校に変えるという、そういう意味では学部教育と附属学校での教育の一貫性を持った改組をしているということです。

■附属学校の義務教育学校化

有馬 附属学校の義務教育学校化によって、これからの附属学校がどんなふうに変わっていくかについて、少し説明がいただければと思います。

加藤 そうですね、附属学校というのは、教育と研究の両方をやっていくことが求められています。教育の部分では、公立学校も、附属学校も同じように質の高い教育を提供できるように努力しています。一方で、附属学校は教育実践を通じた研究成果を地域に発信していくという、そういう役割を担っている学校です。で、九年間を見据えた教育について、カリキュラムを含めてどうあるべきかを地域に発信できたらなと思っています。

有馬 では、学生から見ると、今後の附属学校での実習は、どのような変化が出るんでしょうか。

加藤 来年度から義務教育学校になるので、「小学校」「中学校」という言い方がなくなります。「前期課程」

と「後期課程」という言い方になるんです。先ほど言った小・中免許状併有ということで全ての学生が前期課程と後期課程の子供と接する教育実習を受けるということになります。

有馬 義務教育学校になるに従って、学生の教育実習のやり方もリニューアルされるといふことでしょうか。

教育学部での学生の幅広い学び

有馬 では次に、学生の皆さんの学部における現状とその教育について、ちょっとお伺いしたいんですけども。

加藤 学生の変化に対応しながら、どのような教師像を描き、それに向けてどう育てるかを検討してきました。学生は教育学部の四年間学んで終わりではないので、今、学部の育てたい教師像の一つとして、「学び続ける教師」というのを一番目に掲げています。学部の四年間も大事ですが、一方で卒業後のほうがやっぱり大事なので、伸び代のある若者、教師を育てていかないといけないと考えています。それは学びたいという意欲に支えられた、学び続けられる力を持った教師という言い方もできると思います。このような意欲と学んでいける力を学部四年間でどのように育てていくかということは非常に大事なところで、以前からやっ

ので、このつながるといふことに対して一〇〇〇時間体験で何らかの力を身につけていくことはやっぱり必要かなと。それは相手が子供であろうと、大人であろうと、地域の人であろうと同じだと思っております。

有馬 先生になる人たちは、当然のこととして社会に生きていく人たちを育てていくという役割を担っているという意味で、育てる側の本人も社会体験っていうことは必要なことかなと思われまね。

加藤 これからの学校は、新しい教育課程の中で進んでいくわけです。小学校は二〇二〇年から、中学校はその次の年から新しい教育課程に移行していくことになっています。地域に根ざした学校の中で教育をしていくわけです。「社会に開かれた教育課程」というのが、キーワードになっていますが、学校で勉強することと社会で生きることをどうつなげていくかということ、これがこれからの教育の実践的な課題になると思います。

新しい時代に対応して

有馬 そのほか教育学部が今抱えている課題のようなこととで何かありますか。

加藤 教育学部だけではなく、平成二十八年度、学部リニューアルの一年前に設置した「教職大学院」に求め

ている「一〇〇〇時間体験学修」の位置づけもより大きくなると思えます。

有馬 学生さんが二〇〇〇時間体験をくぐるということについて、手応えみたいなものはやっぱりお感じになっていらっしゃるのでしょいか。

加藤 教師になつている学生は、一〇〇〇時間

以上の体験をしたという実績がありますから、この体験が「教師になる」ことの何か大きな支えになっていると思います。ただ、大事なものは体験の質ですので、どういう体験をすればいいのか。私としては「感動的な出会いと発見」を体験して欲しいと思っています。

有馬 近年のところで、一般的には、学力というキーワードが非常に意識化されて、教室内学習が非常に優位になってきたという現状がありますからね。

加藤 教科指導がきちんとできることはもちろん大切ですが。一方で大切にしたいのは、つながるといふことです。社会とつながっていくことは簡単なことではない

られていることも大きいです。

有馬 それがありましたね。

加藤 教職大学院では学部から上がってくる学生だけでなく、現職の先生と一緒に学修しています。この教職大学院を一つの核にして、いわゆる教員養成から教員研修までの一貫したカリキュラムとその機能強化が求められています。ただ養成して、巣立ったから、さようならではなくて、成長をする学校の先生のサポート役も学部・大学院が担っていくことが今、求められています。

有馬 教職大学院の設置によって、特に山陰における教員養成という役割が強くなったかもしれないし、その辺が教育学部の大事な中核の仕事として位置づくようになってきたということでしょうかね。

同窓会は何をしているのか

有馬 現在、教育学部の同窓会はどんなことをしているかですが、一つは、大学や学部そのものに対して、応援のような、支援のような意味で行っている活動があります。それから、学生さんを応援するというような気持ちでやっていること。それから、あとは卒業していった、当然我々の同窓生の人たち相互の活動の推



加藤寿朗新学部長

進。そして、地域の教育、鳥根の教育の振興に役立つ同窓会活動。地域社会の中で同窓会がどんなふうでなくてはいけないかということは常に意識しているところなんです。

教育学部の先生方にも元気で頑張ってもらいたいという意味で、「教育振興奨励賞」をつくらせていただいたり、それから、学生さんを応援しようという意味で、「奨励金」を差し上げること始めております。それから、学生さんの就活といたってもいいかもしれません、教員を目指す人たちが面接等の練習をされたり、勉強されたりするのを、同窓会の経験を生かしたお手伝いができればということでも支援させていただいて。この辺が学部とのかかわりでやっていることなんですけど。

■学部と同窓会とのつながり

加藤 学部の教員へ教育振興奨励賞をいただいたり、あるいは学生に奨励金をいただいたり、非常にありがたいと思っております。また学生に対して、「面接道場」や「パワーアップセミナー」などで、実際に就職指導というのでしょいか、教職の経験を生かしながら学生を育ててもらっていて、学生にとって貴重な場となっ

いていけないと思っております。

■「新しい」つながりを求めて

有馬 それから、同窓会のほうでは、「同窓会誌」とか、「Leaf@同窓会」という広報誌を毎年定期的に出しております。この、特に同窓会誌っていうのは、もう今回で七十号になります。したがって、戦後ずっと、大学ができてから今日まで発行し続けてきたということになります。

加藤 歴史のある。

有馬 そうですね。歴史のある同窓会誌になっただけで、非常に重要だと思っは、その時々々の大学や学部の状況を記録して、卒業生にお知らせしてきていますので、この同窓会誌そのものが教育学部の歩みなり歴史なりの記録になっ



有馬毅一郎同窓会長

ています。

有馬 同窓会のメンバーというのは、教育界に長らく携わっていた会員もたくさんいるので、経験なり知識が学生の皆さんの今後に立って居る部分があれば、これは同窓会にとっても必要な活動だと思っております。

一方、学生の活動と、卒業生とのつながりの接点になるのが「ホームカミングデー」で、この活動も毎年やってきて、もう十二、三回になります。これも学生と卒業生とをつなぐ場として重視しています。卒業生に、年に一回大学へ顔を出してもらって、学生の活動を見ていただいたり、最近の大学をちょっと経験していただいたり、そういうねらいでやっています。

加藤 十月にあったホームカミングデーに出席させてもらい、卒業生さんにいろいろな地域での取り組みを聞かせてもらって、非常に参考になりました。

有馬 学生さんの活動なり体験なりを発表してもらってことも時々やっているんですが、発表する人以外の学生の参加が少なくて、これは卒業生も学生も同じことなんですけども、ホームカミングデーをもう少し広げるようなことは考えられないかなという思いでいつもおります。

加藤 このような機会を知らない学生もやっぱりいると思いますので、もっと学生に学部の方からも広報しな

るっていう点で、今になってみると貴重な記録として存在してきているなというのを思います。

加藤 来年が大学開学七十周年ですので、七十号というのは非常に歴史のある会誌だと思っております。年に一回発行される同窓会誌を教職員もかなり見えていますので、こういう歴史というものに触れるいい機会になっています。

加藤 先ほどのホームカミングデーに学生の参加があまり多くないということですが、新しいメディアを使っても、今の若者に合う形でのつながり方も考えていけるんじゃないかと思っております。

■「つながり」を生むもの

有馬 同窓会が抱えている課題のようなことについてお話しさせていただくと、今、「同窓会離れ」という言葉を使いながら、私どもの課題として考えているのですが、同窓会のような組織に入りたくない人、そういうのに関わりたくないと思うような意識が強まる時代を迎えているという認識に立って、それをどういうふうに克服していくかに力を注いでいるのです。さつき学部長がおっしゃったように、新しい情報の伝達手段を使ったやり方を若い人たちは望む一方、年寄りの人

たちは同窓会誌などの、ペーパーによる情報提供というのを望む状況にあります。

この二、三年、同窓会誌の編集部のほうでも、そういった同窓会離れをどうするか、同窓会の活動の活性化をどう図っていくかについてにかかわって特集を組んだり、議論をしたり、若い人の意見を聞いたりして今日までやってきました。同窓会を世話する人は高齢化して、なかなか若い人が使う手段がとりにくいという現状になって、その辺が同窓会の大きな課題になってるんですね。



加藤 同窓会もそうかもしれませんが、有志が集まる〇

〇会がなかなか成り立たなくなっていると聞きます。その理由は何かと言うことですが、若い人たちの「つながりの希薄化」みたいなものももちろんあるでしょうし、いろいろな「多忙感」みたいなこともあるんじゃないかなと思います。

有馬 そうですね。

加藤 ただ、これに関わって、大学時代の四年間の横のめに、我々が何をどう意識してサポートしていくかということ、同窓会側も常に考えていなければいけないんです。

加藤 やっぱり同窓会のようなつながりが、若手の教師のサポート役になってもらえると安心感につながるでしょうし、そういうつながりを求めてるんじゃないかなど。

有馬 そうですね。同窓会の現状をいろいろ考えたときに、同窓会っていうものの今後を考えたときに、やっぱり同窓会っていうのは母校の教育学部の、少なくとも精神的な応援団でないといけないと思っています。最近の同窓会のあり方を考えるたびに、同窓会は母校の応援団であるというようなことを中心に、同窓会の特色、意味づけをしてきています。最近ね。同窓会も非力なんですけども、在学生や学校現場の先生たちを少なくとも応援する気持ちだけは強く持つ必要がある。そういう意識を広く卒業生の皆さん全体にもどんな強めてほしいなということ、世話をする側としては願っているところなんですけどね。

「同窓会」への意識づけ

有馬 それで、在学中の学生さんたちが、やっぱり島

つながり、あるいは縦のつながりみたいなものは、どうなんですか。学生は学生なりにつながってやっているように見えるんですけど、卒業した後、同窓会のような形で関係を持つという、そういう感覚が余りなくなっているのかなと。しかし一方、学校現場では、若手教員にとって、中堅、ベテランの先生との関わりは当然、大切になってくるはずですが。

有馬 それは恐らく今でも大事なことで、どんな時代が来ても、やっぱり先輩、後輩の間の学ぶ体制制つていうのは、いつでも必要なことでしょうね。

加藤 そうですよ。同窓会のような、組織でのつながりのようなものが、若手教師を育てる何かにつながっていくのかなと思います。逆にそういうつながりを若手教師は求めてるんじゃないかなと感じています。

学部と同窓会の連携協力

有馬 今、お話が学部と同窓会とのこれからのつながりとか、連携協力のようなテーマに移ってきていると思うんですけども、今おっしゃったように、学部で育つていった学生たちが、先輩の指導を受けながら、現場でうまく育っていく体制が自然にでき上がっていくた

大で学んだ意義を持ち続けていただくために、在学中にもう同窓会意識っていうものを持つてほしいと思います。その一つとして、昨年から「ほっと一息カフェ」っていうのを同窓会事務室で、月に一回開いています。

加藤 ほっと一息カフェ。

有馬 これは、学生さんに同窓会っていうものがありますよっていうことを意識していただくためにも、そして卒業生と接点を持っていたく、心安く卒業生と話し合う機会を日常的に持っていたく、そういうような思いつきでしているんですよ。これも同窓会と学部のつながりもあるし、長らく同窓会意識を持っていたための、在学中の意識づけの一つとして考えているところなんですけどね。

ただ、これもなかなか学生さんに大勢は集まっていただけないという悩みがあって、この辺は学部の先生方にも、また周知について御協力いただかなくちゃいけないなと思ったりもしているところなんですけどね。



